

報 告 書

2010年9月30日

望月厚司様

議員名 佐藤成子

下記のとおり、政務調査費による海外視察を実施したので、ご報告します。

1 日 時	2010年9月20日(月)～9月27日(月)	
2 視 察 先	(1) 国・都市名 視 察 先 施 設 等	アメリカ合衆国・ボストン市／オマハ市 ハーバード大学・ビーコンヒル・州議事堂 ヘンリードーリー動物園・ロリツェン植物園・サファリパーク・ロディオ・パレードなど
	(2) 対 応 者	ボストン市役所担当者・ウォーターフロント再開発公社 オマハ姉妹都市協会など
3 目 的	ネブラスカ州オマハ市と静岡市・姉妹都市提携45周年を記念して、オマハ市訪問親善使節団として40周年の記念の、駿府御門の現況などを視察する。また、ボストン市のウォーターフロントの再開発の先進例を視察する。オマハ市議会の議員との意見交換。そして、より親密な姉妹都市交流を進める。	
4 内 容	<p>(調査事項・調査結果を具体的に)</p> <p>★事前研修</p> <p>出発に先駆けて、アメリカネブラスカ州オマハ市から静岡大学に留学している、ヨハネ・クライン氏を講師にしての姉妹都市オマハの全体像の事前説明があった。</p> <p>オマハ市は、1854年誕生。インディアンの土地が合法的に取られてしまう前に、ブラウン氏が開拓者を連れて開拓したところだ。1857年市制が施行された。人口は432,921人。1965年に静岡市と姉妹都市提携をし、5年ごとに市民訪問団の派遣と受け入れ・隔年の中学生の派遣・ボーイスカウトの派遣などを行っている。特産物は、ネブラスカ牛（140年の歴史）コーンなどがある。</p> <p>★事前自己学習</p> <p>昭和40年の姉妹都市提携以来、任意団体オマハ会を市民が設立し、行政を支援。平成17年・40周年を記念して、オマハロリツェン公園の日本庭園の入口に静岡駿府御門建立。この際は、ボランティアの宮大工、瓦職人、庭師などたくさんの市民がオマハを訪れたとのことだ。この間も、市議会議員相互の交流、教育委員会派遣の先生や静岡大学の学生とネブラスカ大学との交換学生（牧野豊氏による奨学金の設立）の進行や静岡市制100周年には交響楽団の文化交流なども重ね、2006年には、50周年を記念して、文化と芸術の部門で、アメリカ姉妹都市提携協会は、静岡市との関係において</p>	

オマハの姉妹都市提携協会を、最優秀として表彰している。これほど深い関係とは知らなかったので、実際協会の方々と触れるのが楽しみだの思いだった。

9月20日(月)

デルタ航空(13:00成田発)にて、日付変更線を通り、ミネアポリスで乗り継ぎボストンへ。(19:25ボストン着)

9月21日(火)

“ボストン市内視察

『ハーバード大学』

アメリカで最も古い高等教育機関。世界を幅広い分野でリード、現在のオバマ大統領をはじめ、7人のアメリカ合衆国大統領を輩出。また、48人ものノーベル賞受賞者卒業生をだし、もじどおり、アメリカの学部課程ランキングで第一位で、世界の大学ランキングでも1位を独占し続けている、1636年設置の私立大学である。付近には、60を超える大学が存在し、マサチューセッツ工科大学は3キロほどの距離。まさに、ボストンは世界有数の学園都市を形成している。

大学のすぐ側に地下鉄の駅があり、ジョンズステートゲート(正門)に出る。ユニバーシティホールの前には、ジョン・ハーバード氏(最初の寄付者、初代校長)の銅像があり、ホールデンチャペル、ワイドナー図書館などがある。このあたりが一番古いオールドヤードと呼ばれている。図書館システムは、1530万冊の蔵書を持ち、世界最大級の規模で、アメリカ議会図書館に次いで全米第2位。その中心は、ワイドナー記念図書館で、その他90館余りの図書館を有している。多数の日本語書籍を所蔵するイェンチン図書館、カウントウエイ医学書図書館などもある。学生のための大学内のツアーがあり、案内所がその出発点になっている。学生以外も、我々のような観光客?のルートにもなっている。この広大な敷地、緑が多く心地良い。

この巨大な大学運営を支えるシステムは、蓄積してきた寄付金というのは驚きだ。349億円(約4兆円・2007年度)で全世界でも飛びぬけた巨大大学基金だ。教員数は2300名・学部生は、男性3400名女性3200名で、アジア系17%・アフリカ系8%・ヒスパニック8%・白人系48%。大学院生13000名。大学学費は、約400万円。世帯の年収によって、学費免除や減額制度がある。留学生の補助制度も充実している。

『ビーコンヒル』

19世紀のレンガ造りの建造物が続く歴史の町並み。歴史的な建物の保存がなされている。古い石畳が続く。色も統一されていて重厚さが感じられた。玄関先の泥落としは今は無き、その歴史の一旦だ。アスファルトではない石畳が周りとマッチしていて、観光写真になっているのが理解できる光景だ。ビーコンは灯台の照らすという意味があり、山を削って住宅地を開発したと同ったが、この地域にはもともと富裕層が居窮していたとのことだ。このビーコンヒルへ通じるフリーダムレール(自由への道)があり、これは、観光ルートの標示で、歩道などをペンキで赤い線で結び主な観光ルートに通じるように作られている。全長4Kある。街はガス灯で照らされ、派手なネオンは禁止されている。

『ウォーターフロント再開発事業について』

1957年、市議会と州議会により設立されたボストン再開発局による、ボストン市で行なわれた、歴史的遺産の保護と経済活性化の調和による大規模ウォーターフロント再開発の経緯・現状などを伺った。

1955年、マサチューセッツ州法により市の外部部局として設立されたボストン再開発公社が、ウォーターフロント開発を担当。1960年に都市計画局の住宅部門が廃止された。公社の法的権限は、州法に基づき、開発に関する権限の中には、資産の売買や商業施設や住宅の開発を支援するための税の減免権も持っている。

ボストンは、港と共に発展してきたが、陸運・空運の発展や海運の変化により、ウォーターフロントは荒廃しゴースタウン化していた。

100エーカー計画が掲げられ、①海を市民に開放する②隣接地(官庁街など)の衰退を防ぐ③歴史的建物を保存する④ウォーターフロントに住宅地を造る⑤来訪者を増やし、施設などの収容力の拡大する⑥民間投資を拡大し雇用を拡大、市財政の増収を図る①～⑥までを実施する事を戦略として、民間による開発を奨励し、特権をデベロッパーにあたえた。デベロッパーは、建物と土地に対し99年間間の借地権を持ち、一定期間税金が免除され、営業によって生じた総収入から定められた税を支払うシステムを設けた。

1964年から、40年間、このウォーターフロントの管理を再開発公社が続けている。再開発地域の大部分が、州のものだったが、公社に譲渡し、再販も行われ、民間が使用できるように州政府の許可証が発行された。ファニエルホール・マーケットプレイス再開発はそのメインで、ファニエルホール、クインシーマーケット、ノースマーケット、サウスマーケットの4つのレンガ造りの建物を改修した。これは、連邦政府の住宅都市開発局の補助金を活用し再開発もので、一層開発が促進された。年間1500万人の界隈の利用があるという。開発はゾーニングして、行われている。歴史保全地区。レクリエーション地区。新規開発地区。造船所公園地区などだ。歴史公園には、65万人以上の訪問があり最も人気のあるところになった。ボストン再開発公社は、設計・改良工事の実施・すべての公共的開発行為に対する責任を負っていて、民間開発を監視している。

9月22日(水)

『その他市内視察』

ボストン美術館(日本美術の優品を多数所蔵)・ボストン聖教会・ボストンマラソン記念盤・地下の排気ダストの煙突の景観への配慮・街中のゴミの分別などを視察。

9月23日(木)

デルタ航空(9:10ボストン発)でオマハ(13:22到着)に移動。(デトロイトで乗り換え)

空港まで出迎えてくれた静岡・オマハ姉妹都市協会の皆さんにびっくり。ジェスチャーを交えての歓迎ぶり。その夜、ウエルカムパーティー(カフェ・ボードヤール)を開いていただいた。静岡からのお土産を渡したり、久しぶりの再会に話が弾んだ。初めてお会いした、副会長のスーさんとは同い年ということで、いっそう親しく話が出来た。(ブローキングリッシュでしたが)、静岡で教師をしていた先生もいらして、懐かしいお話が伺えた。

9月24日(金)

オマハ市内視察

『ロリツェン植物園』

1982年設立。404、685㎡

駿府御門は健在でした。と言うよりも、5年前に訪問している議員の説明では、周りは、砂利だらけだったのが、こんなにきれいな芝生になっているとは、と感嘆の感想。オマハ市の皆様が大事にしてくれていたことをとても嬉しく思いました。それも、40周年の際、本職の宮大工・瓦職人・庭師のみなさんのプロによる、ミニとは言え、本物のプレゼントだったからだと思います。この植物園には、ベビーカーを押して子連れでいらしている方に何人も出会いました。市民の憩いの場なのだと思います。

『ヘンリー・ドリー動物園』

ネブラスカ随一の観光名所。1894年開設。世界最大規模の施設がある。リエンドジャングル・夜行性動物の展示・屋内熱帯雨林植物園・屋内砂漠など。過去40年間の入場者数は25、000、000人と。びっくり。幼稚園児や小学生の団体に家族連れなどかなりの賑わいだった。こちらもかなりの広さだ。

『オマハ市長表敬訪問・市議会議員、議会訪問』

ジム・ソットル市長(2009年から)を表敬訪問し、静岡からの記念品を渡す。議員との意見交換では、別に仕事を持っていて議員の仕事をしているつまりボランティアということだ。しかも専門職の方が多いようだ。弁護士とか大学教授など。町内会長みたいなものとも違うと思うが、システムが違うのでなかなか話がかみ合わない。議会開催も夜とか休日。選ばれ方も違う様子。興味のあるところだが、こちらでは、むずかしいかも。夜には、ロデオ見学。

9月25日(土)

『リバーシティーラウンドアップ・フェスティバル』

秋の収穫を祝う祭典。まさに、オマハならではの祭典。騎馬隊や、幌馬車、馬車隊。トラクターなどなど。副市長・議長そして、静岡大学からの留学生も参列。カーボウイの妙技や、先住民の踊りを見ながら親睦の輪を広げました。午後は；サファリパークで、バッファローとも御対面。ネブラスカならではの体験でした。

『さよならパーティー』

いよいよお別れです。ジム市長も参列されての和気あいあいのパーティーでした。静岡に11月いらっしゃるといので再会を誓いました。空港まで、お送りくださったスーさんとは、メールアドの交換もしました。この姉妹都市の功労者・竹内氏もいっしょに記念撮影で、今回の訪問親善使節団は終わりました。

9月26日(日)

デルタ航空でオマハ発(9:00)ミネアポリスで乗り換え・ミネアポリス発(15:10)

9月27日(月)

成田着(17:15)

静岡・オマハ市姉妹都市40周年記念式典が盛大に行われた後の今回の親善訪問。健在だった駿府御門もさることながら公園の手入れのよさに感激した。姉妹都市としての配慮が感じられた。視察中も、オマハのみなさんの温かさが伝わってくる。静岡にいらっしゃる時にお返ししたいと思った。姉妹都市事業をうまく機能させるためには、人と人をどう結び付けていけるか、続けていけるかだと思う。一度関わると興味を持つ。静岡市が行っている中学生の派遣事業などは、若い頃から外国に興味を持つきっかけづくりとして重要な事業だと言える。もう少したくさんの方にその機会を与えてあげたいものだ。(予算措置が必要ですが)今回のような定期的な交流には、事前の勉強会ももちろん必要ですが、姉妹都市に関する日常の情報提供がもう少し時間をかけて出来ていれば、より効果的なのではないかと思う。国際交流の方法の再考をしたいところだ。というのは、帰国後、オマハ友の会のホームページに『会員募集休止しています。再募集は未定』とあった。『NPOを目指して組織の充実を図り、今後の交流の多様化する応援活動に、市民・企業の触媒、仲介役として備えていきたい』と。200名を超える市民がかかわった40周年の記念親善交流。この5年間の活動が気になったところだ。継続こそ力だと思う。何故、会員活動が休止なのか気になった。NPO設立に戸惑っているのなら、当局の指導が必要なのではないか。姉妹都市の状況をよく知るためには、現地に赴くまでの積み重ねこそが必要なのではないだろうか。帰国後は、これから、もう少し積極的なかわりを持ちたいと思っている。秋に来静するオマハの使節団に、静岡の歴史やその良さ、観光スポットなど伝えたい。

ボストン市の再開発について。静岡市でいえば、外郭団体のような組織がすべてを仕切っている様子。公的な土地を借地にし、開発を進める方法や税金の減税方法、民間へ土地を売買するなど、自由にできていること等は、学ぶところなのではないか。ゾーニングについては、東静岡地区の開発などでも言われているのに進まないのはなぜか？麻機遊水地などの土地利用などの仕方については、ボストン市は3分の1しかなかった土地を埋め立てて住宅地に造成したりなどしている方法は参考にできるのではないか。ボストン市の開発の仕方は、畑総などの方法と似ているようだが研究の余地ありだと思う。ボストン方式と言われている再開発の仕方は、古いものも保存しつつ、新しい開発をしている。静岡でも、歴史的史跡などを保存しつつ、住みやすい住宅ゾーンや、公官庁などのまとまりのある開発の仕方を進めていけるのではないかと感じた。

街の中のゴミの処理の仕方。ゴミ箱を置かない街づくりもあるが、カラフルなゴミ箱の設置も一つの景観になっていた。地下の換気口にも景観の配慮がなされていたのは素晴らしい。何ととっても、ボストン市の緑の多さには驚く。ハーバード大学の構内の緑も学びの良い環境である。静岡の顔、静岡駅の緑ももう少しほしい。ボストン方式・開発と保存の両輪を回す街づくりの仕方は、わが市でも適用したいものだ。

(注)

- 1 この別紙は、視察先ごとに作成すること。
- 2 各々作成すること。
- 3 この様式により難しい場合は、別の様式によることができる。